



デイトン国際平和博物館： 平和博物館の設立者と寄付者を祝って

初期の平和博物館—スイスのローザンヌにある、戦争と平和の国際博物館(1902年)とベルリンのドイツ反戦博物館(1925年)は、イヴァン・ブロッホとアーンスト・フリードリヒにより設立され、それぞれから多額の資金援助がありました。彼らの壮大なビジョン、勇気、献身と個人的な犠牲なしに、これらの先進的な教育施設は実現しなかったでしょう。近年建てられた平和博物館の多くは、その起源からビジョン、携わる人々の努力まで、彼ら先駆者のおかげです。平和のための情熱的な活動家や、特に平和教育の推進者へと人々を変えたのは、しばしば彼らの戦争体験です。例を挙げると、ドイツのリンダウ平和博物館とヒンデラングの平和歴史博物館で、どちらもトーマス・ヴェックス氏によって設立されました。またドイツでは、ハンス・ピーター・キュルテン氏がレマーゲン橋平和博物館を設立しました。オーストリアでは、初のヴォルフゼックのオーストリア平和博物館は、フランツ・ドイッチ氏による構想で、シュタットシュライニングのヨーロッパ平和博物館はジェラルド・メイダー氏により生まれ、ウィーン平和博物館

はリスカ・プロジェクト氏が尽力しました。オランダのハーグのイ・ジュン平和博物館(李儁烈士記念館)は、リ・キーハン(Kee-Hang Lee)とソン・チャンジョー(Chang-joo Song)両氏のライフワークによるものです。



クリスとラルフ・ダル
(写真提供：デイトン国際平和博物館)

日本にあるたくさんの小規模な平和博物館—例えば、西森茂夫氏によって設立された高知市の「草の家」—は、平和博物館の存在が個人的なイニシアティブや慈善的な活動に支えられています。このことは、マーク・ロゴビン氏とマージョリー・クレイグ・ベントン氏が作ったシカゴの平和博物館と、デイトン

国際平和博物館の起こりを説明することができます。

オハイオ州のデイトン国際平和博物館は、クリスとラルフ・ダル氏によって2004年に設立された、アメリカの唯一の平和博物館です。彼らの継続的な支援と大勢のボランティアの努力のおかげで、当博物館は、2019年の終わりに丸15年を迎えることができました。



当館は、設立者を称える方法の一つとしても、寄付を呼びかけました。当館への惜しみない関わりの印として、設立者のラルフとクリス・ダル氏は、12月に寄付された額の2倍に相当する寄付(合計総額15,000ドル)を申し出ました。それに応じ博物館の存続と大切な仕事の拡充のため、最近平和のための基金「デイトン基金」を立ち上げました。スチュードベーカー家とイングルウッドの友人の寛大な寄付のおかげで、当館の「平和のヒーロー展」は、より広がりがあり、相互性のある展覧会となることでしょう。詳細はこちらからご覧ください。 [Click here](#)

デイトン博物館とデイトン市は、最近国際的な連帯プロジェクト「Peace In Our Cities」(私たちの町の平和)に加わりました。2019年の国際平和デーに設立され、2030年までに都市部の暴力の50%削減を目指し、たくさんの市や国際的なNGOがサインをしているキャンペーンです。世界的にみると、

命にかかわる暴力の82%が紛争地域外で発生しており、多くが都市部(世界の人口の半分が暮らす)に集中しています。Peace In Our Citiesのキャンペーンは、C40都市気候リーダーシップグループをモデルに設計され、今日の最も緊急な課題の一つに取り組む優秀な運営組織となることを目指しています。これはきっと、国連による持続可能な開発目標16(SDG16)への行動も速めるはずで。詳細は、こちらとこちらからご覧ください。 [click here](#) and [here](#).

(イタリアのボローニャ近郊の「国際平和主義ポスター記録センター」設立者ヴィットリオ・パロッティ氏、米国ニューメキシコ州の「ロスアラモス日本研究所」設立者ジュディス・スタウバー氏、そしてカロール・A・ウェルズが設立したカリフォルニア州カルバー市の「政治ポスター研究センター」の以下の記事もご参照ください。)



“Peace In Our Cities”キャンペーンに署名



テヘラン平和博物館のニュース

サハー・タフレシ

テヘラン平和博物館国際関係担当

昨年11月、テヘラン平和博物館の2人のボランティアが、イランの国立科学博物館が開催した“Science for all”（みんなのための科学）フェスティバルに参加しました。このフェスティバルは、化学の異なる面についての知識を得る機会を参加者に与えました。ファルザネ・ナザリの核エネルギーの平和利用についての発表では、農業、健康、水資源の管理等の分野での応用について話されました。彼女はまた、広島、チェルノブイリ、福島の原子力災害について論じました。テヘラン平和博物館とイラン国立科学博物館の協力で、モナ・バダメチザデ氏による武器使用の大量破壊の結末に関連したデジタル・アートの展覧会が開催されました。広島平和記念資料館の2つの絵画も、デジタル画像で展示されました。これら2つは、テヘラン平和博物館が武器の大量破壊の影響についての啓蒙活動に取り組むボランティアの例です。



核エネルギーの平和利用について発表する

ファルザネ・ナザリ氏

昨年12月27日・28日の両日、平和報道協会(Peace Reporters Association)とイラン平和研究協会(Iranian Association for Peace Studies)との共催で、“平和報道のシミュレーション”のワークショップを開催しました。



テヘラン平和博物館の“平和報道シミュレーション”のワークショップ

初日記者は偏重やエスカレーションをどう防ぐことができるかを論証しつつ、平和報道の原理と基本に焦点を当てました。2日目は、人道主義の法律の原理、市民の人命保護と生活の場を破壊から守る必要性、そして報道記者の保護を取り上げました。プログラムは、アフガニスタン政治史の議論と、米国とタリバン間の平和交渉プロセスも扱いました。



これは、それらの交渉の平和報道シミュレーションの準備としての役割を果たしました。参加者はいくつかのグループに分けられ、ワークショップで学んだトピックについて発表しました。大成功のワークショップの終わりに、参加者は参加証を受け取りました。(編集中:ご興味のある方は、米国ミズーリ州パークビルのパーク大学にある、グローバル平和ジャーナリズムセンター発行の雑誌「The Peace Journalist」もご参照ください。詳細はこちらとこちらからご覧になれます。) [click here](#) and [here](#)).

ロスアラモス日本研究所 米国ニューメキシコ州

ロスアラモス日本研究所所長
ジュディス・スタウバー

今年、世界初で唯一戦争で核兵器が使用されてから 75 周年にあたります。発見と惨状の場所ーロスアラモスと広島、長崎ーは、共有の遺産で結びついた、永遠の良心の場所として今も残っています。ロスアラモス日本研究所 (以下 LAJI) は、包容と共感という独特な種類のテーマを推進しています。私たちは、真珠湾を記憶すると同時に、広島と長崎の苦しみも認めることができるのです。米国と日本の歴史は、永遠にリンクしていながら、深く隔たったままです。私たち LAJI は、米国と日本の文化交流、プログラム、講演会と展覧会を通して、より多様性のある内



容の交流を増やしていきたいと設立されました。LAJI は、学生、教育者、芸術家、科学者、ヒバクシャ/原子爆弾の被害者、歴史家、核防衛の関係者、政策担当者、映画監督、博物館の専門家、その他米国と日本の市民対話に関心のある人々等を含む世界のパートナーと、理解の橋を架けたいと思っています。

LAJI は、原子爆弾のより複雑で全体論的な話の相互理解を進めるために、多様で世界的な視点と多様な世代のコミュニティを活動に含んでいます。私自身の異文化間のコミュニケーションについての専門的な知識から、歴史を共有していながら相互理解がほとんどない、良心の場所を結びつけることに情熱を注ぎたいと思いました。歴史の証人となることで歴史が繰り返されないと強く信じ、ロスアラモス歴史博物館の館長 (2011 年~2018 年) として歴史的な友情を称えようと、ロスアラモス

郡を代表し、広島と長崎への理解のために交渉して宣言を出しました。2018年、クリフトン・トルーマン・ダニエル（ハリー・トルーマン大統領の最年長の孫）を有する高名で世界的な諮問会議と、このロスアラモス日本研究所を設立しました。日本のメンバーには、広島で被爆した佐々木禎子さんの兄で、後に「禎子の遺産プロジェクト」を立ち上げた佐々木雅弘氏がいます。詳細はこちらからご覧ください。

[click here.](#)



佐々木雅弘氏

(以下の新刊案内も併せてご覧ください。)

核警報！ 展覧会

「核警報！核新時代の“爆弾”と対決」と名付けられた展覧会が、3月20日～5月6日まで、米国マサチューセッツ州クリントンのロシア・イコン博物館で開かれています。核攻撃のさなかとその

前後に何をすればよいか、冷戦時代一核保有国の米国と旧ソ連とに世界が分かれていたとき一、市民を教育するためのアメリカ政府の努力を紐解いていきます。その展覧会の特集は“爆弾が落ちるとき”で、展覧会の観覧者は、大きなインタラクティブな装置で、核爆発の影響を地理的に理解できるようになっています。

ロシア・イコン博物館は、2008年地元ビジネスマンのコレクションを基に始まりました。博物館は、芸術、特にロシアのイコン（宗教画像）を通して、ロシアと米国との関係がより良くなることを目指しています。ロシアのイコンより他に、原子爆弾にまで踏み込んだ博物館の展示は、他にはないでしょう。詳細は、こちらのリンク [this link](#) とこちら [click here](#) からご覧ください。



「核脅威」像 メキシコシティで披露

メキシコのアーティスト、ペトロ・レイエスさんが創った、膨張可能な大きなきのこ雲の像が、2月14日に披露されました。場所はメキシコシティの、歴史的に重要な地の一つである三文化広場です。ペトロさんは非武装を求める活動を続けてきましたが、この約10メートルの高さの像は、専門家、政治家、関わる市民たちにとって、核の脅威を訴えるための指針となるものです。5月には、国連での核不拡散条約検討会議に合わせて、ニューヨークへと移されます。「原子力科学者会報」に依頼された作品なのです。



レイエスさんが以前行なった有名なプロジェクトに「銃からシャベルへ」があります。銃による死者率が最も多かったメキシコ西部の都市、クリアカンで始められたプロジェクトです。彼は犠牲者の家族に連絡を取り、地域の植物園やテレビ局の協力を得て、キャンペーンに取り組みました。市民たちが

銃を持って行くと、電子機器や家庭用器具のクーポン券と引き換えてもらえます。レイエスさんは、1527個の銃（その内40%は軍事用の強力な自動銃）を集めて溶かし、1527個のシャベルに作り変えました。その後、そのシャベルで1527本の植樹をしましたが、植樹には大人も子どもも関わりました。このプロジェクトでレイエスさんは、死の手段が生の手段になり得ることを示したのです。シャベルは人々に利用してもらうために、幾つかの国の学校や芸術施設に寄贈されました。

もっと情報を得たい方はこれら [\(1\)](#)、[\(2\)](#) のサイトをご覧ください。



「銃からシャベルへ」植樹の様子

「改造」のスライド・ショーは、[ここ](#)で見ることができます。INMP ニュースレターNo.16 (2016年9月 P.6)にも紹介されています。

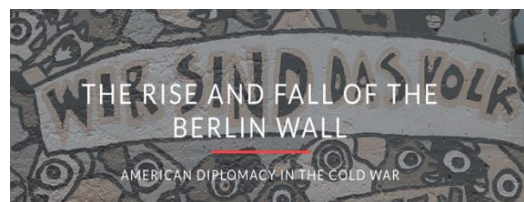
国立アメリカ外交博物館

ワシントン DC で、現在展開中の国立アメリカ外交博物館の使命は、「アメ

リカ外交の歴史、実践、課題」を伝えることです。展示やプログラムを通し、人々に「外交について、またそれが日常生活にどんな影響を与えるか」知ってもらうことを目指しています。「外交がいかにか国の成功に役立ってきたのか、現在の生活に影響を与えているのか、語られなかったことを知り得る、初めての博物館」になります。アメリカ合衆国の国務省（ハリー・トルーマンビル）にあり、国務省、外交センター財団と、公私ともに提携しています。現在、完成への基金を募っていますが、アメリカの主要企業や財団、そして幾つかの国（ブルネイ、クウェート、カタール、UAE）から寄付を受けています。

さらなる情報は、これらのサイト [\(1, 2\)](#) で。

また、8500 以上の収集品は、この[サイト](#)で見ることができます。また、[オンライン展示](#)「ベルリンの壁の歴史」もあります。博物館の予告展示「外交が使命である」というサイトで、博物館の今後を知ることができます。副題「アメリカの安全保障、経済繁栄、世界の指導的立場を進めるために」は、優先するモットーが「アメリカ、ファースト！」だと示唆しているようです。



「外交が使命」展

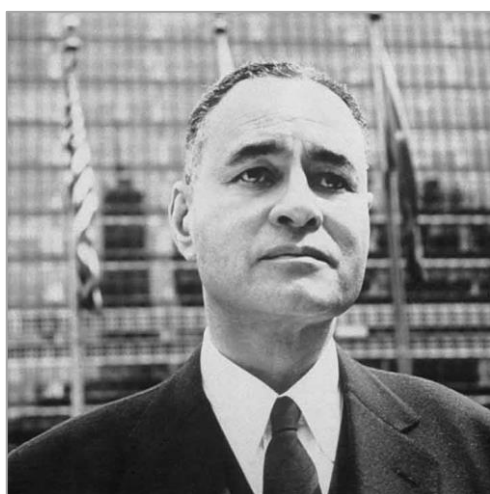
以前は、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下 50 年の 1995 年に、ワシントン DC のスミソニアン協会で、大規模な展示「原子力外交」が計画されましたが、議会や退役軍人からの反対で挫折し、協会責任者が辞任しました。

アメリカ外交の英雄： ラルフ・バンチ展

2019 年 9 月、アメリカ国務省は「アメリカ外交の英雄」という企画を始めました。翌年にかけて、豊富な歴史からだけでなく、今日の「身近な英雄」にも光をあてる予定です。歴史上の人物に、ラルフ・バンチ博士（1904-1971）がいます。彼は国務省の役人で、国連創設に重要な役割を果たした、初めてのアフリカ系アメリカ人です。1955 年

に国連事務次長となり、脱植民地化や人権問題で特に責任ある仕事をしました。1948年の第一次中東戦争での調停を評価され、1950年に（黒人として初めて）ノーベル平和賞を受賞しました。

解放奴隷の孫であるバンチ氏は、生涯かけて公民権運動に関わる一方、世界の困難を抱える地域で、平和のために働きました。



ラルフ・バンチ博士

2月27日に、彼を讃えて外交博物館で記念の催しが行われ、彼の人生や仕事に影響を与えた専門家について、彼自身について、彼が成したことが展示されました。外務省、歴史家、博物館事務所による展示です。

1997年、国務省の図書館には、バンチ氏の卓越した外交貢献を称えて、彼の名が付けられました。（アメリカ連邦政府の古い図書館は1789年、初代国務長官トーマス・ジェファソンにより設けられました。）



マーティン・ルーサー・キング ジュニア、コレッタ・スコット・キングとラルフ・バンチ (Credit: UN フォト)

1980年には、著名なアフリカ系アメリカ人の彫刻家、ダニエル・ラルー・ジョンソンにより、ニューヨークに20トンの尖塔が建てられました。バンチ博士を讃えた塔で、記念碑が未亡人によって除幕されました。そのプロジェクトはアメリカ議会では承認され、資金調達につながりました。

さらなる情報はこれらのサイト([1](#), [2](#))で。

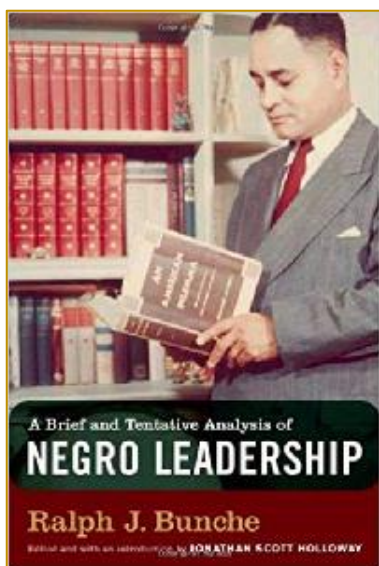


ダニエル・ラルー・ジョンソン作
ラルフ・バンチ記念塔

「アメリカ外交の英雄」に関しては、これらのサイトもご覧ください。([1](#), [2](#))

4 分間の優れた動画「ラルフ・バンチ：平和の英雄」も、見ることができます。

また、ラルフ氏が成したこと、彼の言葉を聴くこともできます。



展覧会「過去をもう一度起こさぬ
ように一コーミゾミサイルから
ベルリンの壁まで」

イタリア・ポローニャ県カザレッキオ・ディ・レノ
「国際平和主義ポスター記録センター」
(IPPDC)、(平和の家“La Filanda”)設立者
ヴィットリオ・パロッチェ

ベルリンの壁崩壊（1989年）の30周年記念、NATO の設立70周年、そして旧ソ連初の核爆弾実験（1949年）から70年を迎えた昨年、カザレッキオ・ディ・レノ（伊ポローニャ）にある平和の家“La Filanda”内の国際平和主義ポスター記録センター（IPPDC）は、「壁ではなく橋を」と名付けた新しい巡回展のため、40枚のポスターを選びました。

同時に、140枚の写真（110枚はブルーノ・ステファニ氏、30枚は私によるもの）を有するもう一つの展覧会「過去を記憶する... ユーロミサイル一コーミゾの非暴力による抵抗の写真展」（伊シチリア、1981年～1984年）も企画しました。2つの写真展は、両者が深く関係していて、カザレッキオ・ディ・レノとゾーラ・プレドーザ（ポローニャ）で、「過去をもう一度起こさぬように一コーミゾミサイルからベルリンの壁まで」の題で公開されています。



伊ヴィチエンツァ近郊の米軍基地“ダル・モーリン”のフェンスのワイヤーを切るオバマ大統領のポスター（2009年）；この重要な基地の拡大への抵抗と、基地の封鎖を求めた運動の中で作成

最初の展覧会は、壁と橋のイメージのコントラストを描き出しています。遠い昔から、壁は—実質的にも比喩的にも—現実を分ける（強力で豊かな武装された少数派によって、戦争、飢え、恐怖に屈した生命が高いリスクにさらされた移民の流入を止める、遮断する）ために造られています。これに対して、橋特有の建築的機能とは、川の両岸と

いう2つの異なる“世界”を結ぶこと、それはすなわち移住する人と移住を受け入れる側の人という比喩的な意味でも、2つを結びつけることにあります。このように、現在では橋は、移民にとっての福祉や社会的統合を提供する“救済行動”や“人道的支援”として考えられます。ポスター展「壁ではなく橋を」は、年々多くの人々を動員する、たくさんの種類の活動をそろえています。

展覧会「過去を記憶する...」は、1980年代シチリアの有名な平和キャンペーンでの事実を現在の若者に関連づけています。キャンペーンは、多くの人々が核戦争（と世界の終わり）を恐れて、核の再軍備に反対する闘いが世界中で起こったことに反応をし、始まりました。部分的にも全体的にも、これらの運動のおかげで、ロナルド・レーガン米国大統領とミハイル・ゴルバチョフ旧ソ連書記長のヨーロッパでの中距離核戦力全廃条約（1987年）が締結されることとなりました。2年後にはベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツの統一がそれに続きました。



レマーゲン橋平和博物館のポスター

“橋を架ける者”は、人類を滅ぼす武器を製造し、橋を造る権力を持った国々の指導者達を打ち破り、顔を上げることができのでしょうか。“橋を架ける者”は、母国を捨て去ることを強いられるような予期せぬ出来事から人々を守るために、人道支援や経済協力、環境に良い持続可能性を優先することができるのでしょうか。最後に、昨年イタリアの新聞「イル・マニフェスト」が読者に尋ねた、「そしてあなたは—どちらの壁を壊したいですか？」の質問に、私の答えを述べて終わりにしたいと思います：「お金のかかる“武装した平和”や危険への代替案と、非暴力についてのメディアの沈黙という壁を壊し、すべての戦争と武力衝突を効率的に防ぐために、証明された代替案を考えることを始めたいと思います。」それが、平和展覧会や平和博物館でもっと示されるべきメッセージであり、アピールです。

政治グラフィック研究センター： 芸術と抵抗の30年を祝って

政治グラフィック研究センター(CSPG)はカリフォルニア州、カルヴァー・シティにある教育研究のための記録保管所です。このセンターでは、社会変革運動に関するポスターを歴史的なものから現代のものまで収集し、保存し、文書を付記し、展示しています。



当センターでは、企画展を創り出すために9万以上の抗議、反戦、人権擁護ポスターや印刷物を使用しています。企画展は出版物となり、巡回展やインターネット上での展示にもなります。このような展示は、人々を教育し、行動を起こす刺激を与えるための政治的芸術の影響力を高めています。このような収蔵品は30年以上に渡って収集されてきたもので、現在も収集が続けられています。これは世界で最も多様な画像資料の収集の一つと言えます。CSPGの収蔵品には、19世紀のポスター（19世紀のフランスの画家オノレ・ドーミエ作の珍しい石版画の風刺画）から第二次世界大戦後のアメリカ合衆国の政治ポスターの最大のコレクションまで含まれています。現在のところ、その内およそ4100枚のポスターをインターネット上で見ることができます。現在世界中で進行中である政治闘争はもちろん、数多くの歴史的な闘争についても、このコレクションを可能な限り代表的な資料集とするために、CSPGはポスターのご寄付をお願いしています。

当センターは芸術歴史家（そして館長でもある）キャロル・A. ウェルズ氏に

より創立されました。1981年以來、彼女は100以上の政治ポスター展を企画運営し、政治ポスターという芸術に関して多くの記事やカタログの小論を書いてきました。CSPGのウェブサイトには出版物の素晴らしいリストも掲載されています。その中には当センターの展示の報告も含まれており、すべてダウンロードすることができます。多くの情報を得ることができる興味深いウェルズへのインタビューはこちらのリンク [this link](#) にあります。このインタビューは、「85,000の世界で最も怒れる政治ポスターはカルヴァー・シティにある」という題で2015年に『LAウィークリー』というロサンゼルス無料週刊新聞に掲載されたものです。



CSPGでのキャロル・A. ウェルズ
(写真提供：ダニー・リアオ)

同様に素晴らしい10分間のYouTubeのビデオがこちらにあります。 [youtube video](#) その中でウェルズは彼女の人生を変えたポスターや、特に発展途上国で文字が読めないとても貧しい人々にメッセージを伝えるというポスターが果たす重要な役割について語っています。多くの巡回展（次の記事をご参照

下さい) をウェブサイトで見ることができます。こちら [Click here](#) により多くの情報が掲載されています。



移動展示「平和の芸術の傑作展」

政治ポスター研究センター(CSPG) (上記の記事をご覧ください) は 24 以上の企画展を企画・運営してきました。その展示には手書きの原本の時代物のポスターも使用されており、そのうち 11 枚のポスターはインターネット上でも見ることができます。それぞれの展示についての解説もあります。そのポスターの題は『帝国に反対する芸術：第二次世界大戦後のアメリカ合衆国の他国への干渉に対するグラフィックアートによる反応』、『団結よ永遠に：国際労働運動で生まれたグラフィックアート』、『これを世界に広げよう！抵抗のグラフィックアートの国際的な広がり』、『小さな部屋から街中へ出よう：LGBTQ の闘いと祝祭』等です。これらの展示はこちらで見ることができます。 [here](#) 特に興味深い作品は『平和の芸術の傑作：より崇高な目的のための気高い芸術』で、こちらから見ることができます。 [here](#).

[Masterpeaces: High Art for Higher Purposes](#) この展示のこれらのポスターに描かれた想像力に富み、多くは印象的でもある画像には、それ以前に描かれた、有名な芸術を再現しているものが多くあります。例としてはピカソの『ゲルニカ』や、ムンクの『叫び』、ミケランジェロの『聖母子像』の彫像などが取り上げられています。しかしながら、作品の焦点は、反戦、反核、自然環境、女性の権利などの現代の問題に当てられています。その改変内容は、その状況と意味を変えるために元の芸術作品の上に文章を置くなど単純なものです。



ランバート・スタジオ(株)制作のポスター(アメリカ合衆国・1969年)

『戦争はよい商売です—あなたの息子さんを投資しなさい』という作品の中では、殺された息子を抱きかかえて嘆く母の聖像(1499年ミケランジェロによる『聖母子像』の大理石彫像)の悲しみが、ベトナム戦争に対する辛辣な

抗議に変えられています。加えられている文章は、広告の売り文句、戦争で暴利を貪ること、そして軍産複合体をもじったり風刺したりしたものです。5万8千人以上のアメリカ合衆国兵士と数百万人のベトナム人がこの戦争で殺されたのです。もう一つの例はレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画を使用したものです。『モナ・リザ』(1503)が障がい者の権利を向上させるために創造的に改作されています。



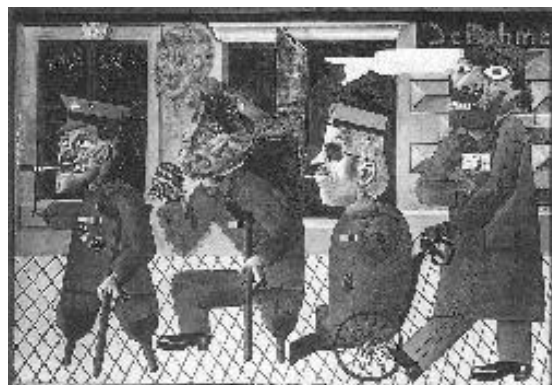
『誰も完全ではない』クラウス・シュテーク作(ドイツ・1981年)

オットー・ディックスによる『障がい者となった帰還兵』制作100年

最初の（そして同時に最後の）国際ダダ展示会が1920年6～8月にベルリンで開催されました。ダダイズム運動（伝統的なヨーロッパ文明を否定し、既成のあらゆる社会的道徳的束縛から精神を解放して、個人の真の根源的欲求に忠実であろうとした運動

<ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典>)は、第一次世界大戦中に亡命していたドイツ人の芸術家たちによって1916年にチューリッヒで始まりました。ベルリンでの展示会では、ジョージ・グロスやジョン・ハートフィールドなどのこの新しい芸術運動の巨匠達の作品が展示されました。この展示は資産家のための芸術に対する拒否を示すことになり、このダダイズムの反乱は後のポップ・アート（大衆芸術）、コンセプト・アート（概念芸術）、シュールレアリスム（超現実主義）などの近代芸術の発展を促すことになりました。展示された作品は油絵、水彩画、線画、コラージュ、ポスター、書籍の表紙、広告、そしてダダイズム新聞で構成されていました。

主展示室は二つの大きな油絵で占められていました。グロスによる絵画『ドイツーある冬の物語』は、ドイツ社会の三つの支柱となるもの、すなわち教会、軍隊、学校に対する批判でした。これらは共謀して市民を洗脳し、後に破滅的な戦争となる状況に向かう心の準備をさせていたのです。



オットー・ディックス作『45%仕事に適任だ!』(1920)

グロスの絵の向かい側の壁にはオットー・ディックス(1891-1969)の絵画『障がい者となった帰還兵』がありました。ディックスはこの作品に『45%仕事に適任だ!』という題をつけていました。この絵には4人のドイツ人の復員軍人が軍服正装で街中を行進している異様な行列が描かれています。このように恐ろしく傷つけられ障がいを負わされた人々は、第一次世界大戦後のドイツでは(そして他の国々でも)全く珍しくなかったのです。第一次世界大戦では8万人のドイツ兵が手や足を失って前線から帰ってきたのです。この絵画でディックスはすべての人を非難しました。つまり、彼は軍隊が彼の世代を虐殺したことや、一般大衆がこれらの義肢を付けさせられた人々に魅了されること、そして障がいを負わされた人々自身が国に対する誇りを失っていないことを激しく批判しているのです。

ディックスが1920年に制作した反戦絵画のいくつかの中で最も大きな作品である『障がい者となった帰還兵』は、ベルリンダダ展示会で展示された作品の中で最も批判された作品の一つでした。1927年にこの絵はドレスデン市立美術館が購入しました。その同じ絵画が、10年後の1937年にミュンヘンで開催された悪名高いナチスの展示「退廃芸術」で目立つ位置に展示され貶されたのです。その絵に添えられた説明文には「世界大戦でのドイツの英雄たちに対する侮辱」と書かれていました。

1942年にナチスがこの絵を破壊したとされています。

25年前(1995年)に、ベルリンの国立美術館が、ディックスが1920年に制作していたもう一つの反戦絵画を購入しました。この絵画も第一次世界大戦で障がいを負った退役軍人を描いたものでした。ディックス自身も第一次世界大戦からの帰還兵で、ドレスデンのカフェで3人の手足を失った退役軍人がスカット(トランプのゲーム)をしているところに偶然出くわしたことがあったのでした。その退役軍人たちは腕と脚がなく、顔にも大きな負傷を負っており、義肢を使っていました。この絵画は、これまでに表現された作品の中で最も強力な反戦メッセージの一つであると広くみなされています。こちら [go here](#) とこちら [here](#) により多くの情報があります。



『スカットに興じる人々』
オットー・ディックス (1920年)

平和を視覚化する

『平和と変化：平和研究ジャーナル』（第45号, 2020年1月号）最新号は『平和を視覚化する—最先端の芸術』という主題の特集号です。編集者による巻頭紹介記事に続いて、『平和美学』、『平和を視覚化すること—視覚化された平和に関する研究の様々な色彩』、『アフガニスタンの映画「ある戦争」における平和の語り』、『映画「マンガの夢」における平和の視覚的隠喩』といった記事が掲載されています。驚いたことに、また残念なことに、この中には平和博物館や平和のための博物館における平和の視覚化に関する記事が掲載されていません。実際、そのような博物館や平和に関する展示、平和に関する記念建造物にさえ一言も触れていないのです。そのような平和の視覚化の様々な方法を記録し分析するかなりの著述があるにもかかわらず全く掲載されていないのです。記事の寄稿者の数人はドイツ人ですが、ハンス-マーティン・カウルバッハ（シュトゥットガルト州立美術館学芸員）による先駆的研究のどれかに言及されているところがないか探しても結局見つけられないのです。

インターネット上で簡単に検索してみても、『女性平和活動家』（世界中の様々な場所で活躍する1000人の女性平和活動家に関する巡回展示）（こちらでその展示についての記事を見ることができます。 [‘Visualizing Women](#)

[Peace Activists’](#)）や、『100個の展示物の中にある世界平和の歴史：平和博物館における平和の視覚化』（[‘The history of world peace in 100 objects: Visualizing peace in a peace museum’](#)）などの記事を見つけることができます。横断幕や壁画を通しての平和の視覚化についても、また「核兵器に反対するヴィジュアルアートの芸術家協会」（VAANA）についても言及されていません。VAANAは、芸術を通して大衆の意識を高め、仲間である平和団体を支援するために1984年にニュージーランドで創立され、数多くの平和団体のためのグラフィックアートや平和をテーマにしたポスターなどを制作し、それらは世界中に広がってきました。その創始者であるマーガレット・ローラー・バートレットによって書かれたこの団体の素晴らしい歴史をこちらのサイトで読むことができます。 [go here](#) また、こちらのリンクもご覧ください。 [this link](#) 平和を視覚化する試みに関する代表的な概観に期待されるような内容を考慮すると、この150ページある『平和と変化』誌の特集号の記事はむしろ本筋からはずれている末梢的な内容であるように見えます。



オークランドにある最近修復された平和を主題にしたVAANAの代表的な壁画

コベントリー市(イギリス)の 平和の道

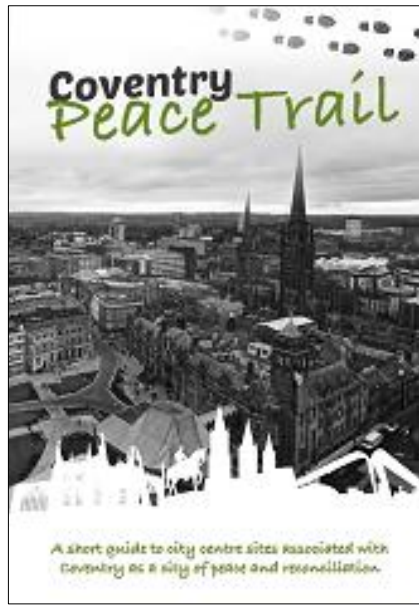
『コベントリー平和の道』は、平和と和解の都市としてのコベントリーと関係のある、市の中心部にある場所についての 20 ページの挿絵入りガイドブックです。この道は、1940 年 11 月 14 日に空襲で破壊された聖ミカエル大聖堂の廃墟から始まります。この大聖堂は空襲で失われたイギリスで唯一の大聖堂なのです。その廃墟は戦争の影響を強く感じさせる象徴として建物の残骸が残されており、巡礼の場所としても人々が訪れています。1990 年の 11 月 14 日にコベントリー空襲後 50 年ということで銘板の除幕式が行われました。その銘板には「国が国に対して刀を振りかざすことはさせてはならぬ。戦争を習い覚えるようなことも、もうさせてはならぬ」(旧約聖書ミカ書 4 章 3 節)という言葉が刻まれています。その 5 年後に第二次世界大戦終結 50 年を記念してこの大聖堂はジョセフィーナ・ヴァスコンセラスの『和解』という彫像のレプリカの寄贈を受けています。(このレプリカはベルファスト、ベルリン、そして広島でも見ることができます。元の作品はイギリスのブラッドフォードにあります。) また、このガイドブックでは戦争で亡くなった市民を追悼するための記念碑も紹介しています。その市民には、連合軍の爆撃で亡くなったドイツの市民、特に 1940-1945 年の

間のドレスデンの攻撃で亡くなった方々も含まれています。その近くには 2 本の櫛の木が植樹されています。1 本はオノ・ヨーコによって 2005 年に植えられ、もう 1 本は 1968 年 6 月に彼女がジョン・レノンと一緒に植えたものです。それ以前に、オノは平和を祈念して 2 つのドングリをこの大聖堂の敷地に植えていたのです。



この平和の道にはドレスデン・プレイスという広場とそこにある銘板も含まれています。その銘板は 1974 年にその広場につけられた名前を記念してドレスデン市長によって除幕されたのです。それは両市の友好の絆の証明として設置されたのです。「戦時の破壊から生まれ、今は国際理解と平和のために捧げられている」とその銘板に刻まれています。この 2 つの市は 1956 年から姉妹都市提携をしています。

『平和の道』はこちらのリンクからダウンロードできます。[this link](#) (初期の版の『平和の道』は INMP ニュズレター第 25 号 (2018 年 12 月号 p.24) に短く紹介されています。) 平和と和解の都市としてのコベントリーに関するより多くの情報をこちらで読むことができます。[go here](#)



カンボジアとタイ国の博物館とセンター3カ所の訪問に関する報告

キヤ・キム

(ピース・マスク・プロジェクト代表)

1. カンボジア地雷博物館 (カンボジア、シェム・リアップ)

何十年も続いた戦争の後、1990年代初期に見積もられた数では、8百万~1千万の地雷やその他の不発弾がまだカンボジアの農村部全体に撒かれています。これらの地雷を処理する大規模な国際協力による努力で地雷や不発弾の数は半減したと考えられています。この国で地雷のために重傷を負って手や足を失った人の数は、今日までにおよそ4万人で、その全人口に対する割合が世界で最も高い国の一つです。最近でも昨年、地雷関連の死者が11人出ています。これらの戦争で使われる無差別殺人のための殺傷能力の高い兵器のた

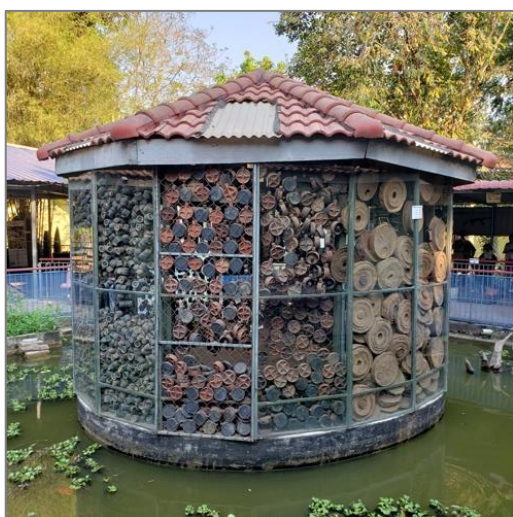
めに、農地に近寄ることもできず、その他の生活の糧を得る手段も失ってしまったため、農村部に住む世帯はずっと経済的に安定することが難しいのです。

世界遺産であるアンコール・ワットの一部であるバンテアイ・スレイ寺院の近くにあるカンボジア地雷博物館（公式サイトはこちらです。[The Cambodia Landmine Museum](#)）はほとんどの旅行者がよく立ち寄るような典型的観光地ではないかもしれませんが、その設立者のアキ・ラーは多くのカンボジア人から生ける伝説として賞賛されています。彼は、クメール・ルージュの下で少年兵として戦い、後に脱走してベトナム軍に加わり、その兵士だった期間に自分の手で埋めた地雷は何千もの数になったと推定しています。戦後、彼は自分が埋めたのと全く同じ不発弾の除去をするための国連軍に参加し、この活動に人生を捧げてきました。この博物館は1997年に初の地雷博物館として開館し、2006年に閉館を命じられたのですが、2007年にまた新しく開館しました。



カンボジア地雷博物館の入り口にある博物館の看板

何年もの間、世界中の多くの後援者からの支援によりこの博物館は地雷のために負傷したり、孤児になってしまった子どもたちのための家、危険に晒されている若者のための学校を設立し運営してきました。また、博物館のスタッフのために住居や食料を含む様々な機会や給付を提供してきました。「ここでは私たちは家族のようなものです。私はとても幸運です。」とここで働いているある若い母親は言っていました。



地雷博物館にある地雷が詰められた「塔」

博物館の建物自体は、アキ・ラーが何年もの間収集してきた不活性化された地雷の多くが全館に展示されています。これらの地雷のほとんどは中国、ロシア、アメリカ合衆国で製造された物です。この博物館を訪れると、来館者はこれが遠い過去の話ではなく、現在も進行中の構造的暴力であることに気づかされます。この博物館の掲示板に最近掲示されたアメリカ人に訴える

手紙には、「1月31日(2020年)にトランプ氏はアメリカ軍の地雷使用を解禁しました。私たち地雷博物館関係者はアメリカ合衆国が取っている方針に大変失望しています……。地雷は、私たちが互いを兄弟姉妹と考えて、すべての場所から取り除かれることを要求するときこの世界から無くなるでしょう。」と書いてあります。



地雷原でのアキ・ラーの写真(2000年)

アメリカ合衆国大統領ドナルド・トランプの地雷解禁に関する記事をこちらで読むことができます。[here](#) もしあなたがアメリカ市民でしたら、この問題についてあなたの住む地域の下院議員と(又は)上院議員に連絡を取ることをご検討下さい。国際地雷禁止条約の締結国と非署名国のリストがこちらにあります。[click here](#) 『ガーディアン』に掲載されたアキ・ラーについての記事はこちらにあります。[The Guardian](#)

2. パッターニ・アートスペース (タイ王国南部パッターニ県)

ジェハブダロ・ジェソホーはタイ国パッターニにあるプリンス・オブ・ソクラー大学に勤務する35歳の美術の助教です。彼は、社会的・経済的に恵まれていない若い芸術家のための現代芸術の学びの場となることを目指す共同体の指導的立場にあります。その共同体は、イスラム教の少数民族とタイ国政府との間の現在も続く紛争の中心部にその本拠地を置いています。この場所は「パッターニ・アートスペース」と名付けられており、その綴りにはマレー系イスラム教徒の文字であるジャーウィー文字が使われているということは意義深いことです。この文字はイスラム教徒の地域共同体の母語であり、政府が指定したという“Pattani”というつづりよりもジャーウィー文字を使う方が民族の主体性が断固として主張されるのです。



ジェハブダロ・ジェソホーとそのいくつかの作品

この共同体は、作品展示場と作品を制作するためのアトリエ、そして宿泊所を10人の若い芸術家たちに提供しています。そして来館者には喫茶コーナ

ーを提供しています。ここでは毎年8月に国際芸術祭が開催されます。この芸術祭では、芸術を通して平和のための運動を構築する活動に参加してもらうために、世界中から協力者を招待しています。ジェソホーは「芸術は、真実を表現することによって紛争を変容させ、壁を壊すことができる」と信じています。この未来像こそが、彼らの年に一度の芸術祭に近隣からも遠方からも支援を集めているのです。



ジェソホーとパッターニ・アートスペースに住んでいる芸術家たち

作品展示場で現在公開されている展示は「拷問されて」という題がつけられています。そこに展示されている作品には、この共同体の若い芸術家による自画像の連作が含まれています。彼らはその作品で、肉体的に受けた暴力、監禁、強制された自白、家族から引き離される経験などを通して彼らが負わされた苦しみを表現しているのです。注目すべきことには、かなりの数の自画像が笑顔を描いているのです。このことについて尋ねられた時、スタッフ

の一人はこう答えました。「苦しみにも関わらず、私たちは希望をまだ持っているということと、希望こそが私たちに威厳を与えてくれるということとその笑顔は示していると思います。」



「拷問されて」の展示の中のこの共同体の芸術家の自画像

タイ国にお越しの際はこの共同体を訪れていただけましたら、共同体の皆さんが歓迎して下さいます。「パターンニ・アートスペース」とその年に一度の芸術祭のビデオをこちらで見ることができます。[here](#) こちらからそのフェイスブックのページ（タイ語）を訪問することができます。[Facebook page](#) ジェハブダロ・ジェソホーの芸術作品に関する個人のウェブサイトはこちらにあります。[go here](#)

3. ボファナ視聴覚資料館（カンボジア、プノンペン）

ボファナ視聴覚資料館は、（こちらがこの資料館の公式サイトです [Bophana Audiovisual Resource Center](#)）クメール・ルージュの暴力恐怖時代のある若い女性の悲劇的な愛の物語から名付けられており、カンボジアの映画制作者

リティ・パンによって 2006 年に創立されました。この資料館は、世界中から集められたカンボジアについての映画、テレビ、写真、音声の記録の広範囲にわたるデジタルデータベースを一般市民が無料で利用できるように資料を提供しています。時間との闘いの中で紛争中に組織的な破壊を免れたわずかながらも集められる限りの視聴覚資料を保存するために、この資料館は上映時間で700時間以上分もの資料を不断の努力を重ねて収集してきました。その資料は、「映画の父」とも称されるフランスのリュミエール兄弟が 19 世紀に制作した最初の映画にまで遡り、カンボジア人に彼らの貴重な遺産を学ぶ窓口を提供しています。



階段吹き抜けに飾られているボファナの絵

ボファナ資料館はこの貴重な歴史的記録資料を管理研究しているだけではなく、教育的ワークショップや映画上映会、研修会を通して地域共同体とも関わっています。パンによれば、「カンボジアは若い国です。私たちは若者たちに将来への展望を与えなければなりません。過去は私たちに明日起こるかもしれないことを教えてくれるのです。そして画像は私たちに考えさせ、私たちに考えるための資料を与えてく

れるのです。そのためにこれらの資料はここにあるのです。考えることはつまり私たちが前進するための素晴らしい強さになるのです。教育は私たちが映像を分析し、技術を習得する助けになります。創造することによって、私たちは自分の意見を自由に話すことができるようになりますが、また、私たちが何を見てどのように感じているかを表現することもできるようになるのです。」

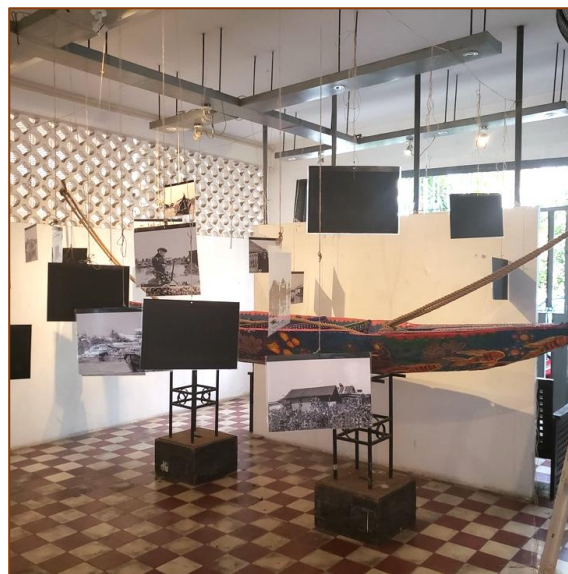


額入りのリティ・パンの映画のポスター

彼らが現在取り組んでいるプロジェクトの一つはカンボジアの先住民のための全額給付奨学金を提供することです。この奨学金は、特に差別に直面している女性やその他の団体を対象としており、24ヶ月間の映画制作とマルチメディア研修に対して支給されます。

カンボジアの NGO 「平和を創造する女性たち」との素晴らしい協力制作展では現在、ベトナム人のボート・ピープル（トンレ・サップ湖の水域上で暮らす放浪共同体の難民）によって撮影された写真を展示しています。プノンペ

ンにあるボファナ資料館のロビーには、その写真展示の側に、色とりどりの水性動植物の象徴で装飾された 30 年前に作られた木製の船も展示してあります。「平和を創造する女性たち」のウェブサイトはこちらにあります。[Women Peace Makers](#))



ベトナムのボート・ピープルによって撮影された写真の展示

ボファナ資料館の研修プログラムについての記事をこちらで読むことができます。[here](#) 映画制作者でこの資料館の創立者であるリティ・パンへのインタビューをこちらで読むことができます。[here](#) EU とレイ財団との協力によりボファナ資料館が作成したクメール・ルージュに関する教育のためのスマートフォン用アプリケーションをこちらのリンクから利用することができます。[this link](#)



新刊案内

(1) 『芸術・記憶・公共の場』

ゲルニカ平和博物館は『芸術・記憶・公共の場』という題の本を出版しました。この本は同じ題の巡回セミナーで2018年中に開催された一連の活動の間に著名な専門家によって発表された論文をまとめたものです。そのセミナーはゲルニカ、グラノリェース、バルセロナ、サルタグダの4都市で行われました。この図版を含む239ページの本は、寄稿文と5カ国語でのその翻訳も掲載しており、この博物館の館長であるイラツチェ・モモイショ・アストルキア氏によって編集されました。その著者や芸術家たちはこのような問いを発しています。「私たちはいかにして消えてしまったものを描写することができるだろうか？・・・言葉だけで描写しても十分に伝えきれないような恐怖やトラウマをどうしたら説明できるだろうか？前の世代が自由のために戦ったことに対する価値を覚えていない健忘性の社会における倫理的空白をどう埋めるべきなのだろうか？」



『芸術・記憶・公共の場』の表紙

(2) ジャン・ポール・ヴィエヌ

フランスの平和に関する主要な作家で活動家であるジャン・ポール・ヴィエヌは最近独創的で興味深い記事をフランスの平和に関する月刊誌 *Planète Paix* (『平和の惑星』)に投稿しました。(2020年2・3月号第649・650号 pp. 28-29)その題は「軍事博物館の良い利用法」で、ヨーロッパのいくつかの国々で多数の軍事博物館を訪問し、軍事博物館の簡潔な類型論を提示しています。彼はウィーン軍事博物館のモットー「戦争はこの博物館の中にあるべきである」が印象深かったと述べており、また彼は多くの軍事博物館がどの程度数少ない平和博物館を補完しているとみなされることができるとについて問いかけています。ヴィエヌはドレスデンにあるドイツ軍の主要博物館であるドイツ連邦軍軍事歴史博物館を最も平和主義的な博物館として選び出しています。

8 mars - Journée internationale des Droits des femmes



筆者がこの博物館を選んだことは、ヨーロッパでは第二次世界大戦末期に向かっていた1945年2月の物議を醸した連合軍側の空襲でほぼ完全に破壊された街であるドレスデンにおいてはおそらく驚くようなことではありません。この著者は、人間が互いを全滅させるために発達させてきた戦争と破壊のための数えきれないほどの道具に直面するとき、絶望に打ちひしがれない来館

者なら更に断固として戦争に反対するようになるだろうと信じているのです。著者は『平和の惑星』の編集委員の一人ですが、国際平和博物館ネットワークに関して「博物館を通しての平和」(2017年2月号第619号 p. 23)という記事で言及しています。その雑誌はこちらからダウンロードできます。[here](#)



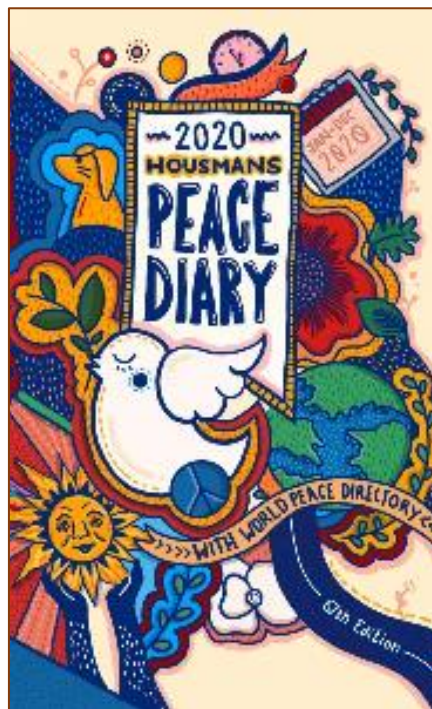
ドイツ連邦軍軍事歴史博物館(ドレスデン)

写真提供:ニック・ハフロン

(3)「平和の日と記念日—その起源と使用」

このニューズレターの以前の号で(2019年3月号第26号 pp. 15-16掲載の『世界平和団体住所録』についての記事の中で)年に一度出版される『ハウスマン社のピース・ダイアリー』が話題を呼びました。2020年版のこの本に掲載されている特別小論は「平和の日と記念日—その起源と使用」についてです。その小論はおよそ25の記念日の詳細について記述しています。その中には良心的参戦拒否者、戦争の犠牲となった子どもたち、核兵器全廃、女性に対する暴力の廃絶、人種差別の根絶などのための国際記念日が含まれています。その記念日の中には世界平和、マーティン・ルーサー・キング・Jr.、国

連、人権、平和運動に参加したために逮捕された政治犯などに捧げられたものがあります。平和博物館は、講演会、映画上映会、展示などの一般市民向けの行事を企画運営することで、このような記念日を祝うのに適役と言える立場にあります。

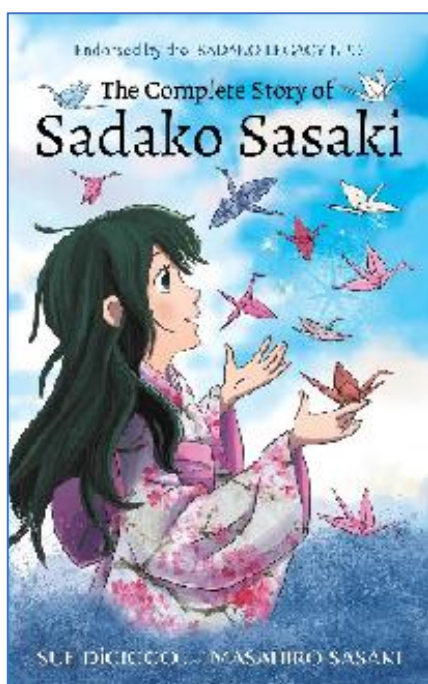


(4)佐々木禎子の物語完全版(佐々木雅弘・スー・ディチッコ共著)

この本は英語で書かれた禎子についての初めての完全な物語です。原子爆弾が広島を破壊した時、禎子は2歳、兄の雅弘は4歳でした。

彼らは生き残りましたが、禎子は10年後に被爆による白血病で亡くなりました。この本には、これまで非公開だった禎子と家族の写真も掲載されています。2009年に彼女の兄は「The Sadako Legacy (禎子の遺産)」というNPOを

設立しました。数多くの作品を出版している児童文学作家であり、挿絵画家であるスー・ディッチコは 2012 年に The Peace Crane Project (平和の鶴プロジェクト) を立ち上げています。こちらにより多くの情報が掲載されています。 [go here](#)



この通信は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、安斎育郎、キヤ・キムによって編集されました。

また日本語版の翻訳は、赤松敦子さん、寺沢京子さん、山本美穂さんが担当しました。この通信は、INMP の個人と組織をつなぐ重要な場です。また INMP の会員では

ない方が世界の平和博物館の活動を知る上で、大変重要です。

以前発行された通信は [INMP の新ウェブサイト](#) で読むことができます。

<http://tinyurl.com/INMPMuseumsForPeace/>

INMP の通信は年に 4 回発行されますが、定期的に読みたい方は、メールアドレスを次のメールにお知らせ下さい。

inmpoffice@gmail.com

2020 年 6 月に発行される次号に投稿したい方は、2020 年 5 月 15 日までに原稿をお願いします(英文で 500 語以内、日本語の場合 1000 字以内、写真 1-2 枚)。直接英語による原稿を書くことに困難がある場合には、以下の INMP 日本事務局にご相談ください。 inmpoffice@gmail.com

INMP コーディネーターからの お知らせ

INMP の会費と寄付をお願いします

INMP の財政はみなさまの会費と寄付によって成り立っています。これまですでに会費を支払った方には感謝申し上げます。まだの方は、よろしく申し上げます。

* 日本の方は、次の口座に振り込むようお願いいたします。

年会費 2,000 円
※送金先：INMP 郵便局振込用口座
記号 14480 番号 49799181
名前 アイエヌエムピー
他金融機関からの振込の場合
店名 四四八 (ヨンヨンハチ) 店番 448
普通預金 口座番号 4979918